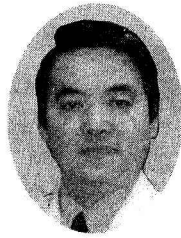


## 多文化共生と相互扶助



AMDA インターナショナル理事長

すが なみ しげる  
菅 波 茂

ポジティブリストか、ネガティブリストか

物の見方や考え方が異なる人たちが同じ社会で生活するための原則をどうするのか。違いは財産かお荷物かという質問になる。一つの基準として「ポジティブリストか、ネガティブリストか」という設定がある。ポジティブリストはしてもいいと決まっていること以外はしてはいけない。ここでは効率が勝負になる。ネガティブリストではしてはいけないと決まっていること以外はしてよい。柔軟で自由な発想が勝負になる。未知との遭遇には強い。

相撲は四十八手で勝負を競う。ポジティブリストである。プロレスはチョークなど反則技でなければどんな技を発明して使ってもいい。いわば、ネガティブリストである。プロレス界はルールの多様化によってどんどん分化し、格闘技という新しい業界を形成している。相撲人気は頭打ちで、逆に格闘技のファンは増える傾向にある。

注目すべき社会現象である。

価値観の多様化。先行きの見えない乱世。決定的にネガティブリストの世界である。失敗は成功の母であると言う。これは嘘である。何事も成功モデルに学べ。例えば、「鳴子よさこい踊り」は全国の若者の踊りチームを高知に引き寄せている。鳴子を使う。よさこい節で踊る。道路に寝てはいけない。これ以外の創意工夫はなんでもよろしい。服の形・色、音楽の種類、踊り方、靴、帽子、珍奇さ、はでさ、地味さ、気にせずにとんどんやってください。

価値観の重層化と最低限のルール

今の日本には閉塞感が充満している。国全体が突破口を探している。学校教育の問題が指摘され、詰め込み教育が批判されている。だからゆとりを持たせよう。自由な時間を生み出したらどうだろうか。ボランティア教育をやってみたらどうだろうか。いろいろな提案がある。私の個人的な見解では、日本はポジティブリストの社会である。ポジティブリストが社会基準になっていることが制度疲労を来していると考えたい。ネガティブリストを社会基準にすることが真の突破口だと考える。

文化とは集団の価値判断である。多文化とは異なる価値判断の重層化である。多文化共生とはお互いに未知との遭遇を経験することである。したがって、ネガティブリストを導入しないと、ポジティブリスト社会は価値判断の重層化を受け入れることができずに社会的混乱をま

ねくことは容易に想像できる。

では、多文化共生社会にネガティブリストを導入するとすれば、最低限のルールとして何をしてはいけないと決めたらいいのだろうか。それは2つある。即ち、人を「自殺」させないことと、人を「野垂れ死に」させないことである。人を自殺させないことが「人権を守る」ことであり、人を野垂れ死にさせないことが「平和を守る」ことである。

#### 本音と建前

「人権・反差別・平和」は世界のキーワードである。誰も反対できない。誰も文句が言えない。だからこそ危険でもある。メッセージのないキーワードの一人歩きは相互不信をまねく。日本式の「人権・反差別・平和」教育は世界に通用するのだろうか。日本のそれは、論理的というよりも、情緒的であった。成果は「やさしさ」に求められてきた。「NOと言わない。言えない」、問題を問題であると言うこと自体が問題になるような建前社会になってしまった。本音が悪になった。ところが、世界の現実の本音で動いている。

本音の世界と建前の世界が交差した時にいったい何が起こるのか。例を述べる。世界の富の80%を、20%の人口が享受している。残りの80%の人口がわずか20%の富を分け合っている。貧しい国の人々が日本人に要請する。「援助してください」と。日本人が渋ると問題が起きる。「なぜ貧しい私たちに援助してくれないのか」、「心がと



がめないのか」、等々。非難をかわすために、とりあえずお金をあげておく。本音と言えないのである。「私が一生懸命に稼いだお金だ。あれこれ指図される筋合いはない。」と。本音を言ったら悪人になってしまうのではないかと自己嫌悪に陥るのである。

親が子どもの教育に困っている。子どもに用事をいつける。子どもは言い返す。「じゃまをしないで。自主的に主体的にあることに取り組んでいるのだから」と。「自主的に主体的に」と言われると、親は困る。だから、不本意ながら認める。「我が子も自主的に主体的に行動できるようになったのか」と。大間違いである。子どもはただ遊びをじゃまされたくないだけである。そのために親が金縛りになる建前の言葉を使っただけのことである。親は自らを慰める、誉める。「やさしくていい親なのだ」と。

#### 「あいさつ」「ありがとう」「名前」

人権先進国カナダの人たちから、大虐殺のあったルワンダの人たちまで、すべての人々に理解してもらえる「人権・反差別・平和」の定義が必要である。私の独善的な定義を紹介したい。「人権」とは人を自殺に追いやらないことである。人権の概念が発生したキリスト教では自殺は禁じられている。自殺は人が生きる権利を放棄することだからである。では、人はいかなる時に自殺を凶るのか。社会から見放されて絶望するにいたった時である。見放されるとは、「誰からも関心を持たれない。

必要とされない。記憶に留められない」という状況である。関心とは「あいさつ」。必要とは「ありがとう」。記憶に留めるとは「名前」である。この簡単なことが他人の「基本的人権」を認めることの初歩である。「あいさつ」のできない子、「ありがとう」と言ってもらったことのない子、人の「正式な名前」を言えない子が増えている。

私は、「平和」とは人を野垂れ死にさせないことであると言った。「今日の家族の生活と明日の希望」が実現できる状況である。今日の生活とは、食べられることと健康であることである。明日の希望とは、子どもに教育を受けさせることである。この平和を妨げる要因として戦争、災害そして貧困がある。「平和」とは、いうなれば「基本的生活権」である。

「差別」は公平さの影である。反差別といってもわかりにくい。「公平さ」とは、意欲があり能力がある人が、機会を得て自己実現ができることである。差別とは意欲と能力があるにもかかわらず、機会が得られなくて自己実現ができないことである。ちなみに、能力はあるが意欲がない人に機会が与えられなくても差別にはならない。意欲は倫理道徳、能力は経済、そして機会は政治の分野に属する。

#### 困った時はお互いさま

人はなぜ人を助けるのか。キリスト教徒は「人権の尊重」から人を助ける。それは自らの魂の救済になる。緊

急人道援助については、聖書のマタイ伝の18章に次のような章句がある。「まさに町の焼け落ちんとする時にこれを助けるは神の子なり」と。キリスト教徒なら聖書の文言を信じて実行すれば魂の救済が得られることになる。だから困っている人なら誰でも助けてあげる。

日本人は伝統的に困った時はお互いさまという相互扶助の精神である。ただし、これは生活の救済であり、魂の救済とは無関係である。“うち”（知り合いの間柄）には親切にするが、知らない人にはどちらかと言うと冷たかった。しかし、阪神・淡路大震災の救援活動は新しい相互扶助の精神を生み出した。知らない人とでも助け合いを通して知り合いになった。将来私が困ったら助けてください。だから「ボランティア元年」なのである。

結論を急ぎたい。日本社会に多文化共生を導入するとすればポジティブリストからネガティブリストの社会に改革する必要がある。基本的に守らなければいけないことは「自殺」と「野垂れ死に」の防止である。それには困った時はお互いさまの相互扶助精神を発揮した社会活動が期待される。そのためにも基本的にネガティブリストの世界である NGO・NPO の社会活動の活性化が望まれる。NGO・NPO は、募金、援助、活動、収益事業、広報、会員等々、創意工夫が価値を決める。NGO・NPO の多様性は人間の活性化・地域の活性化の指標にもなる。